

企業アーカイブズ機能 の立ち上げ事例

帝国データバンク史料館

創業100周年記念社史編纂が土台に

株式会社帝国データバンク 会社概要

- 本社所在地 〒107-8680 東京都港区南青山2-5-20
- 創業年月日 1900（明治33）年3月3日
- 従業員数 3,200名（取材部門として1,700名）
- 売上高 506億円（2016年9月期）

- 1900（明治33）年 帝国興信社創業
- 1981（昭和56）年 帝国データバンクに社名変更
- 2000（平成12）年 創業100周年
- 2007（平成19）年 帝国データバンク史料館開館

信用調査業

- 19世紀、イギリスで誕生 Mercantile agency（「興信所」と訳される）
- その後、アメリカで企業化
- 日本では
 - 1892年 外山脩造が大阪で商業興信所を創業
 - 1896年 渋沢栄一が東京で東京興信所を創業
 - 1900年 後藤武夫（福岡県出身）が東京で
帝国興信社創業
（帝国データバンク前身）

現 帝国データバンク史料館 高津隆館長
1992～ 社史編纂準備委員会（企画部広報課）
インタビュー（2013年1月31日）



過去に発行した社史（類似刊行物）

- ➡ 65年史：『65年の歩み』、薄い冊子
- ➡ 80年史：書籍、業界紙記者がライター

100年史刊行準備の初期

- ➡ 92年4月、社長と専務に呼ばれる「本格社史として100年史作りたい」
- ➡ 92年10月準備委員会、片腕となるスタッフ来た。
- ➡ もともと企業史料協議会の会員でもなかった。
- ➡ 「社史ってなんだろう」と思い、経営史研究所や川崎図書館に行ってみた。
- ➡ ビジネス誌で経営史研究所を知る。行ってみる。

現館長の個人史と100年史刊行準備

- ➡ 札幌から戻ってきて広報課長に。
- ➡ 1989年に社内報発行を命じられる。初めてコーポレートコミュニケーション的社内報作成。
- ➡ 歴史モノを載せた特集を行った。
- ➡ 古いモノを探した。
- ➡ 部下を引っ張る。広報誌メンバーだった（人事部出身）。
「使いやすかった」
- ➡ 92年ごろは経営史研究所、川崎図書館にとにかく行っていた。
- ➡ 経営協会の社史セミナーや年史センター（大日本印刷）のセミナーにも参加。

印刷会社選定前後まで

8

- ➡ 初めA社に声をかけた。
- ➡ 93年または94年ごろB社とも付き合いが始まる。
- ➡ 95年ごろ、両社にプレゼンしてもらった。見積もりも。
- ➡ 92～95年ごろ内輪で出来ることからやっっていこうという感じだった。
- ➡ 92年4月～93年、社内勉強会行う→『TDB社史編纂だより』を出すことに（2000年までに20号発行）。
- ➡ 93～94年ぐらいに契約。
- ➡ その後契約先に紹介された専修大学麻島先生を監修に立てた（97年3月～）。
- ➡ 事務局には戦前、戦後、普及版、それぞれに一人ずつ担当を置いた。

100年史刊行の意思決定をめぐって

- いろいろな会社が社史を送ってきたりするのが刺激になったのではないか。
- 100年史刊行の明確な目的を文章化したものはない。

書きにくい歴史について

10

- ➡ 現館長1980年入社。
- ➡ 1960～80年代労働争議あった。裁判を抱えていた。
- ➡ 失敗の歴史、とくに争議に関しては寛容。
- ➡ 3代目「労使紛争は会社近代化に必要だった」。教訓。懐古談かもしれないがきちんと話せる。
- ➡ 全ての人事調査報告書は焼却した。その通達は残っている。
- ➡ 争議に関してはタブー無しでどんどん書く。
↓
- ➡ 社長に対して、史料へのフリーアクセスを認めてくれるようにと主張。
- ➡ 既に活字になっているものは掘り下げる方向で。それほど緊張しなかった。
(同和問題は緊張)
- ➡ タブーはないと思っていた←4代目「本当のことであれば何でも書いていいよ」 (1993年9月24日の第1回編纂委員会議事録で触れられている。)

中国関係

- ➡ 映像取材がたいへんだった。
- ➡ 中国の外事弁公室の認識は「調査＝スパイ」という認識。
- ➡ 南京支店長が生きていたのでインタビューした。
→ 日本国内と海外で「調査」自体は変わらない。

同和関係

- ➡ 同和関係記述に関して編纂委員会では誰も何も言わなかった。10分ぐらいで終わった。（これは現館長の記憶違い。1999年7月5日第8回編纂委員会議事録では議論になっている。）
- ➡ 96年ごろ3代目にインタビューを行った。
- ➡ 同和地区出身女性、結婚。
- ➡ TDBが人事調査を受注。女性自殺。3代目は葬儀参列とのこと。
- ➡ 現館長、部落解放同盟中央本部関係者にもインタビュー。

（『情報の世紀：帝国データバンク創業百年史』71～72、392、395、397、475～476ページも参照）

労使紛争



1953年6月から8年間、ロックアウト断行等で会社業績低迷



複数の労組結成、統合、全社的労組組織結成・・・等複雑な経過をたどる



各種規則・規定の制定と、その適正な運用など経営の近代化に結果として結びつく

帝国データバンク創業百周年記念プロジェクト百年史編纂室編『情報の世紀：帝国データバンク創業百年史』東京：帝国データバンク：2000

人事調査



明治末年ごろまでには出現



1960年代～70年代にかけて人権意識高まる



1931年6月には水平社による糾弾会→社内通達



1960年身元調査に関わり女性自殺



1979年結婚調査に関わり事情聴取



1981年12月、人事・雇用調査廃止

100年史の構成、編纂手順、印刷会社の提案など

- 目次は当初テーマ別、部門別だった。
- 仮目次は印刷会社を作り、その後監修の先生の手が入った。
- 「人事調査」「労使紛争」に関しては100年史にしっかり書いた。
- ↑
- 「きちんと残していったほうがよい」「信用にかかわる」から。
- 資料として整理して、残していったほうがよい。
- ↓
- 印刷会社に言ったこと「まずテーマがあるのではない。事実をきちんと集めて、整理して、その後にテーマが来る」
- 印刷会社はすぐに「まず仮目次を作りましょう」と言うが、これは違う。
- 「最初に事実、アーカイブズありき」

監修の先生との関係、経営史研究所

- 監修の先生と編纂委員会の価値観、方向性は一致していた。
- 優秀会社史賞はとれなかった。資料がないから、顧客構造が分からず記述できなかったことが受賞を逃した理由。

100年史編さんからアーカイブズ、史料館へ

- ➡ 1999年秋（9～10月）最後の編纂委員会で「史料室を作った方がよい」と高津現館長が提案。
- ➡ 2002年6月ぐらいに「史料館作れ」という話が来た（現館長52歳）
- ➡ たぶん新宿区の土地利用のことがあったのだろう。
- ➡ 90年代最後に防衛庁前土地を落札。史料館開館は2007年。
- ➡ 秘書室のスタッフからは96年ぐらいに「史料館作ったら」という意見が出ていた。

史料館の社内での活用

- 新入社員研修、インターンシップ、現職者研修などで必ず史料館見学入れる。
- 取引先、セミナー時にも見学組み込む。

T D B
World
Chronicles

情報の世紀
帝国データバンク創業百年史